

# *Barnaby Rudge*

— 個 の 成 長 —

藤 本 隆 康

Dickens の小説には *Oliver Twist* の救貧院、*Nicholas Nickleby* の私立寄宿学校など、社会的問題を扱っている場合も見られるが、どちらかと言えば、個の面白さが打出されていると言えよう。われわれに親しい Samuel Weller, Micawber, Uriah Heep など、共感を与えてくれる人物とは言えないが、特異な「個」として忘れられない。社会は、個がつくりあげる相対的、公約数的な場所である。しかし、焦点を絞って微視的な目で見る時、公約数では割り切れない、端数のもつ多様性に気づかされるであろう。*Sketches by Boz* 以来、巷を歩きながら執拗に社会の片隅と個を見つめつづける Dickens は、こうした杓子定規に合わない個の不規則性を、情熱をかけて描写する。この不規則性こそ、何が起るかわからない偶発のエネルギー源ではあるまいか。Dickens の文学のもつ多様性と生命力は、こうした不規則な端数の開発に依拠したものであるとも言えよう。もちろん、人の運命として作家も、歴史の枠から食み出すわけにはゆかない。個と社会の調和的發展が、素朴に受け入れられ、いかなる社会問題も、それが一時的なものとしてその治癒の可能性を誰ひとり疑うものもいなかった時代——微細な個が、社会の盛衰にいまだに関与するという有機的感情が失われていない時代に生きた作家として、彼は mass の中に埋没しきらない特異な個の力を捉えたのであった。

社会的な関連においてみると、Dickens は、先にあげたように、*Oliver Twist* においては1834年改正の新救貧法、*Nicholas Nickleby* では学校経営、*Dombey and Son*、*Hard Times* では功利主義、*Bleak House* では裁判

所、とそれぞれに対する批判をのぞかせてはいるが、多少の差はあれ、個の腐敗が社会の腐敗を象徴していると言えるだろう。そして異色な作品として *Barnaby Rudge, A Tale of Two Cities* といった二つの「歴史小説」を残している。しかし、その前面に出てくるのは歴史的叙事性よりもむしろ、事実を題材として豊かな想像力によってつくりあげられた fiction であり、主役は、やはり何の変哲もない個なのである。

*Barnaby Rudge* は1841年に出版された作品である。「80年代の暴動の物語」(*A Tale of the Riots of 'Eighty*) という副題が示しているように、1780年代、Lord George Gordon によって帥いられ、1778年制定のカトリック教徒援護法を議会で廃止させようとして起された暴動を取扱っている。作品のモチーフは、早くから Dickens の心に暖められていた。思いついてから五年の年月を経て、漸く日の目を見たわけであるが、この点でもこのモチーフにおける Dickens の並々ならぬ関心がうかがわれる。Dickens の最初の考えは、Boz 式に、この暴動の異常な面を描くことにあったらしい<sup>1)</sup>。けれども、五年の才月のうちに、Carlyle, Bulwer の影響を受け、又自らも次々に継起する社会の激動を目にして<sup>2)</sup>、暴動を単なる事象として捉える態度から、その背後にあるものに触れようとする意識を確立していった。そして、そうした意識が *Barnaby Rudge* の構成に多大な影響を与え、さらに Dickens 持前の描写力と相俟って、特異な「歴史小説」を生み出すことになったと言えるだろう。そして更に、こうした構成の中で登場する人物たち

- 1) K. Tillotson, "Introduction to *Barnaby Rudge*," *The Oxford Illustrated Dickens Edition* (1961) (以下の Dickens の作品からの引用はすべてこの版による)
- 2) J.Lindsay, "Charles Dickens," in *Dickens and the Twentieth Century* ed. by J. Gross and G.Pearson (Routledge and Kegan Paul, 1962), p.96. Lindsay はここで, Poor Law riots to Chartist upheavals at Devizes, Birmingham, Sheffield; Mass-gatherings on Kersal Moor, Kennington Common; The Newport insurrection; The 1840 trial of Edward Oxford for shooting at the Queen などをあげている。

も、単なる特異な個性の持主としてではなく、社会的、歴史的な連関の中で捉えられてくることになる。

前半は、**John Willet** の経営する **the Maypole** を中心に **story** は展開する。

静謐な自然に囲まれ、快い佇みを見せる **the Maypole**。寂れた塀に纏わる蔦の一枝にも、古き時代から絶ゆることなく人々の営みを凝視しつづけてきた時の重味が記される。齢を重ねた **the Maypole** は、顔の皺の一つ一つに、そして一毫の白髪にも、長い年月の喜びと悲しみの実りを豊かに息づかせる円熟した老人の面貌にも似通う。夏の夕日に映し出されるその佇みは、濃緑の木立を背景にこよなく美しい。人々は完璧な時の回転に快く身を委ね、この調和の中に、幼児の如く憩うのである。**The Maypole** の主人である **John Willet** は、自らの生活をこよなく愛し、その単調な流れの中に快く身を落ちつけている。ウィンクをしても、恰も一瞬片目だけ眠っているのではないかと思わせるほど動作が緩慢で、頭の回転も驚くほど鈍いのであるが、それだけに挺でも動かさぬ重量感を抱かせる。朋友の **Solomon Daisy, Tom Cobb, Phil Parkes** なども、混沌として茫漠とした時空の中で醸造される **Willet** の言葉には、千金の重味を感じるのである。こうして、馴染の取巻に囲まれて、雨混りの冷く激しい嵐を断固遮断した暖い部屋でパイプを燻らせながら、馴れ親しんだ会話に耽るといふことになれば、**John Willet** ならずとも、**the Maypole** が未来永劫に亘って陥落することはない堅城であることを毫も疑うことはできないのである。

しかし、こうした冒頭の快い雰囲気の中にも、冷く暗い影が仄かに宿る。**The Maypole** の温もりを異様に翳らせる一つの影——。この影は **Rudge** 夫人の妄想の中に棲息して、彼女の天日のような心を凝結させ、曾ては花咲き匂う野原を駆け巡った乙女も、忌わしい日陰の放浪者に成り果てる。そして第十六章に描かれる幽霊男。夜の帷がおりて人影が絶え、一層に心淋しい辻や露地、そして墓地に、何処からともなく出没し、墓場からさ迷い出た亡霊のように心定まらず、暗黒の世界に徘徊する。すべての人々が知り、すべ

ての人々がその何者であるかを定かには知らない。恰も自らの罪を知らぬが如くに……。冬の吹雪の中に、ポッカリと浮彫りにされる明かるく春の如き **the Maypole** の温もり、そして錠前屋 **Gabriel Varden** の愚かしく暖い家庭の奏でる二つの快い主旋律が、時折こうした陰鬱な第二主題によって中断する。そして恰も晴れやかな天が俄に掻き曇り、暗雲空を蔽うかの如き戦慄が走る。

さて、こうした前半の雰囲気の高まりは、**the Maypole bar** で語られた殺人事件の真相、**Rudge** 夫人に取り憑く影の正体、**Barnaby** の見る **nightmare** の起因など、推理小説的な **suspense** さえ感じさせて、以後の経緯に対して十分な期待を抱かせてくれる。しかし、好奇心を掻き立てられて後半に読み移る時、読者は余りの騙され方に愕然とするのではあるまいか。

後半の第一章とも言うべき第三十三章は、巻頭と同じく舞台は **the Maypole** である。五年の才月が経過しているが、相も変わらず **John Willet** は取り巻きに囲まれて安泰である。ただ息子の **Joe** が **John** の余りの頑固さに反抗して出奔しており、暖炉の上に貼られた搜索願のピラが一抹の影を落している。そこへ恐怖の余り、自らが幽霊のように蒼白になった **Solomon Daisy** が風雨と恐怖に打ちのめされて、**the Maypole** に辿り着く。例の幽霊を墓地で見たというのだ。

こうして、前半の物語の発展を予測させながらも、物語は新たな登場人物を迎えて、予想外の方向を辿ることになる。時とは無関係なところで営みを続けていた人達が、突然に歴史の舞台に引き上げられる。樵夫と農夫たちの仕事<sup>1)</sup>が、誰も知らないどこかで、いつの間にか完成しようとしているのだ。個人の自由な営みを巻き込んでしまうであろう群衆という海の藁が、幽かにも無気味に聞こえてくる。物語の後半は、**Gordon** によって帥いられる暴徒が、カトリック教徒援護法反対を旗印として繰り広げる暴動が圧巻となってくる。勿論そうだからと言って、これまでの展開が無視されるというの

1) *cf. A Tale of Two Cities*, p.2.

ではないが、新しい波に押し出されて、遠慮勝手に顔を覗かせるに過ぎない。こうした **plot** の断絶、憔悴ないし重複は、繊細な神経をもった読者には堪えられないことである。ただ暴徒の起す凄じい嵐に、その不満も消し飛んでしまうことにはなるのだが。

さて、この作品は、最初の契約の時には **title** が “**Gabriel Varden, the Locksmith of London**” となる予定であったのが、**Bentley** と再契約を結ぶとき、“**Barnaby Rudge, a Tale of the Riots of '80**” と変わったいきさつがある。このことは、この作品の長所と欠点を奇しくも表現している。まず、**Gabriel Varden** の象徴する一市民の日常性と、**riot** のもつ歴史性との唐突に過ぎる出会いが指摘されよう。後半の舞台で、この二つのテーマが混り合うまでに五年という準備期間が置かれてはいるが、やはり **plot** 挫折の感は拭われない。

*Barnaby* のテーマを思いついた1836年から、作品が世に出る1841年までの間に、**Dickens** が **Carlyle, Bulwer** の影響を多大に受けたことは、**J. Lindsay** が詳しく指摘している点である<sup>1)</sup>。**Dickens** は、当時勢いを成してきた暴動を自らの目によって確かめたり、**Newgate** を自ら訪れて、死刑を前に苦悶する囚人に出会ったりした経験から強い衝激を受け、それが作品形成の起電力になってゆくわけであるが、もし個人的な衝激を表現するだけで終るなら、*Nicholas Nickleby* の **Dotheboys Hall** の域を出なかったであろう。これまで感性的、個別的に捉えていた悪を、**Carlyle, Bulwer** の影響によって社会的背景において見る方向を獲得したのであった。すでに個は孤立した存在ではなく、ある体系の中に組み込まれた必然的な存在として捉えられる。先に個と社会の唐突な出会を欠点として指摘したわけだが、もし **Dickens** の個に対する見方に進展が見られるならば、作品前半の個的世界は、何らかの形で、後半の全的世界に繋がりをもってくるはずである。そし

1) **J. Lindsay**, op. cit., pp.94—96.

て結論を先に出すならば、この二面性という困難があったからこそ、それを調和、統一させるために ‘a herculean effort’<sup>1)</sup> がなされたわけで、その統一の過程に、やがては Dickens が *Dombey and Son* で確立する芸術的手段への第一歩が認められるのである。それ故に *Barnaby Rudge* は、Dickens の小説の中で、歴史小説として特異な立場にあるだけでなく、後半の作品への踏み台として、極めて重要であると言えるだろう。

暴動の首謀者として Hugh, Ned Dennis, Lord George Gordon, Simon Tappertit, Barnaby Rudge, Mr. Gashford といった abnormal な characters が当てられていることには、誰しも疑念を挟むところである。精神病院から逃げ出した三人の狂人に暴動の先棒を振らせようというのが Dickens の最初の意図であったらしいが<sup>2)</sup>、そう言えば上記の人物たちは全て尋常でないところがある。Gordon, Barnaby が明かるい形で精神の稀薄を顕わすのに対し、Tappertit, Hugh, Dennis, Gashford は歪められた暗い精神界を居場所とする。このような特異な個が煽動する暴動は、それこそ特異な現象として、悪くすれば一笑に付されることにもなりかねない。しかし執拗にこうした設定に固執する Dickens の姿勢は、単に監獄が襲撃されたり、精神病院が解放されたという噂を聞いた時の衝激の余波であるというだけではなく、もっと内面において熟成され、煮詰められた悟得の表現であると見なされ得る。

Barnaby, Gordon といった idiot を用いることは、Dickens の独創ではなく Scott の影響が見られるが、しかし Dickens は自らの idiots には、Scott に比べて遥かに重大な哲学的負担を荷わせている<sup>3)</sup>、と J. Lindsay は述べている。Gordon と Barnaby は濃度は違っても idiot であるという点で共通しているが、二人のなりの奇異性にも驚かされる。Barnaby の方は、不様な継接を施し、髭々しいモールのついた緑色の服を着ているところ

1) J. Lindsey, op. cit., p.93

2) K.J. Fielding, *Charles Dickens* (Longmans, 1965), p.75

3) J. Lindsay, op. cit. p.95.

までは良いが、さらにあくどい色のひだ飾りをつけ、帽子には孔雀の羽を房にして飾り、それがだらしなく背中にかかっている。刃も鞘もない刀の柄を脇につけ、雑色のリボンやガラスのがらくたを装飾にしているという物凄さである<sup>1)</sup>。そして、それにも増して **Gordon** の服装も異様だ。痩せた馬に跨がり、顔のあたりまで垂らせた長髪を風に吹かせて、鯁こ張った四肢を馬上にぎくしゃくとさせながら、ドン・キホーテ宜して進んでゆく。手には鞭の代わりに頭が金色の杖を持って、不様にポーズをつくり、しかも真面目腐って、服装といえば奇異を衒ったように異様ときているから、どんなに不機嫌な者でも思わず嘖き出してしまうほどだ<sup>2)</sup>。

勿論、外観は内面の代弁者であり、前者が自己の内に魂の調和を知らず、外界からの刺激によって、野性的で無秩序な反応を見せる自然児であるのに対して、後者は妄想と虚栄より生まれる自己欺瞞的な理想を、自らが果すべき使命とまで信じるほどに精神機能を喪失した偽善者である。このように、人の失笑を買う程の **Gordon** が、世の最下層にまで押し流され、踏み蹂られて人達の心を掴むことになるのは、陰で **Gordon** を操る **Gashford** の権謀術策に拠るところが大きい。**Gashford** は信仰という高い理念に仕えるどころか、個人的な怨恨を晴らす手段にまでして、**Protestantism** の流れを濁らせて憚らない。**Gordon** の熱し易く、狂信的な性格は、暗愚な大衆の心には権威を恐れぬ英雄として映るとしても大衆の中に潜む暴発のエネルギーに点火したところで、余りにも幼くてうつろな彼の精神が受け止め得るものではない。**Gashford** はその間隙の中に巧みに入り込み、点火されたままで持って行き場のない大衆のエネルギーを、自己薬籠中のものとするのである。

空虚な理想と個人的怨恨の醸し出す犯しい雰囲気、そしてそれに酔う群衆——それはひとつの戯画である。その背後にあるのは、**Dickens** の体制へ

1) cf. *Barnaby Rudge*, p.28

2) cf. *Ibid.*, pp.280—281.

の幼児の如き信頼である。どんなに荒れ狂い、どんな破壊が行なわれようとも、それはあくまで異常な一時的な精神錯乱の生み出す混乱に過ぎず、正統な流れは何一つ損われはしないのだ。そして、そうした態度は暴動の「心」に対する憐憫に向かう。彼らの行動の背後にあって、彼らが表現し得ぬ暗い内面の動機を汲み取り、それに光を当てようとする **Dickens** の意図も見えて、その齎す荒廃と恐怖にも拘らず、暴動そのものも明かるく色付いてくる。

その内面の暗さと、表面の明かるさを象徴している人物が **Barnaby** である。父が殺人の大罪を犯した呪いか、**Barnaby** の精神の半ばは暗い。血を恐れ、恐しい夢魘に嘔まれもする。そして彼の暗い半面が暴動の罪性に感觸するのか、父に遣わされた罪の具現者 **Stagg** によって、母と二人で過していた平和の園を追われ、ロンドンに出て暴徒の波に巻き込まれてしまうのである。

けれども、**Barnaby** の心は無闇に蠢く群衆の中であって、何処からとも知れず差し込む光に感応する。それは、つぎの **passage** に見られる **Barnaby** の感動である。

The widow's work was yet upon her knee, and strewn upon the ground about her; and Barnaby stood leaning on his spade, gazing at the brightness in the west, and singing softly to himself.

'A brave evening, mother! If we had, chinking 'n our pockets, but a few specks of that gold which is piled up yonder in the sky, we should be rich for life.'<sup>1)</sup>

夕焼に見る黄金は、満たされない人達に代わって答えてくれる言葉である。**Barnaby** が節制と禁欲に生きる母の孤独な姿を無心に眺め、得体も知れず自分達を重圧するある力から、それを和らげ、自分達を解き放ってくれる何かを探る時、黄昏を染める紅は、暗闇に閉ざされた心を慰め導く光になるのだ。その実体は定かには捉えられないが、恰も盲人が光に牽かれるが如

---

1) Ibid., p.342.

く、夢中になって黄金の実りを訪ねゆくのだ。主義もなく無秩序に荒び狂う暴動の最中にあっても、**Barnaby** は光を見失なわない。

The subject of this dialogue and of these concluding remarks, which were uttered in a tone of philosophical meditation, was, as the reader will have divined, no other than **Barnaby**, who, with his flag in his hand, stood sentry in the little patch of sunlight at the distant door, or walked to and fro outside, singing softly to himself, and keeping time to the music of some clear church bells. Whether he stood still, leaning with both hands on the flag-staff, or, bearing it upon his shoulder, paced slowly up and down, the careful arrangement of his poor dress, and his erect and lofty bearing, showed how high a sense he had of the great importance of his trust, and how happy and how proud it made him. To **Hugh** and his companion, who lay in a dark corner of the gloomy shed, he, and the sunlight, and the peaceful Sabbath sound to which he made response, seemed like a bright picture framed by the door, and set off by the stable's blackness. The whole formed such a contrast to themselves, as they lay wallowing, like some obscene animals, in their squalor and wickedness on the two heaps of straw, that for a few moments they looked on without speaking, and felt almost ashamed.<sup>1)</sup>

**Barnaby** の明かるい姿がくっきりと描き出されていて、暴動の本質が吐露される。群衆の混沌とした濁りの中にあって、清らかに無垢であり続けるためには、そしてそうした中になお美しい夢を描くためには、**Barnaby** という精神的不具者の心で表現するよりほかなかったのだ。その意味で、**Gordon** と **Barnaby** という二人の **idiot** を通して、暴動の「心」を表わそうとした **Dickens** の意図が、よく汲みとれる個所である。

**Barnaby** は群衆の中に紛れ込んでしまっても、その中に同化することはな

---

1) Ibid., p.398.

い。Mrs. Rudge は黒い影を追い払うべく群衆を求め、Rudge は Haredale の執拗な追跡を暗まそうと暴徒の渦に紛れ込む。けれども *Barnaby Rudge* の mob は個の罪性を消滅させるほどの社会的な力をもたず、個の罪意識、恐怖は何ら希釈されないままである。しかしながら Rudge の場合のように個の罪性を深刻に追跡する面がある一方、個の集合体である mob のもつ力に対する畏怖も随所に見られる。

群衆の爆発的な生命力は、屢々 sea, ocean, river, tide, float, wave, swell, melt といった潜在的なエネルギーを持つ言葉によって比喻されている。*The Pickwick Papers* に横溢した生命力は、この作品では mob が受け持つ破壊的エネルギーである。Edgar Johnson の言葉を借りれば、「荒び狂う二百ページ亘って、暴動が募りゆき、騒乱で沸騰する騒擾たる物語」<sup>1)</sup>と言われるまでに、暴徒の動きは凄じい。そして圧巻は Newgate 襲撃である。堅牢な外壁と門は、あらゆる不法を断固撻付けける権威の象徴であるが、mob の怒涛のような破壊力には抗し切れず、崩れ去ってゆく。これを描く Dickens は最早傍観者の席を下り、自らが mob の中に溶け込んで暴力を振うのである<sup>2)</sup>。こうした Dickens の mob への共感、溢れ出るばかりの活力をもった Dickens の資質からくるのは勿論だが、自身、Author's Preface で述べているように、Mary Jones という女性が処刑されたことに対する、法への体感的不信から強くきていると言えよう。Mary Jones というのは、まだ十九才以下とも見える美しい若妻で、二人の子供を抱えて道で施しを乞うほどまでに金に困窮し、ある時呉服屋に入ってリネンを売台から取って外套の下に隠したが、それを店員が見咎めたので、それを下に戻した。そしてただこれだけのために、彼女は首を括られてしまったのであった。

---

1) Edgar Johnson, *Charles Dickens* (Little, Brown and Company, 1951), p.329. cf. ... *Barnaby Rudge*, boiling up in those two hundred tumultuous pages of mob fury...'

2) K. Tillotson, op. cit., vi. 'I have just burnt into Newgate, and am going in the next number to tear the prisoners out by the hair of their heads.'

野蛮な暴力を振って、社会の美しきものを破壊する **mob** であるにも拘らず、先に述べた明かるさを漂わせるのは、**Dickens** のこうした共感によるのであろう。現に **mob** のひとりひとりを取り上げてみるなら、彼らは街路掃除人であったり、教会の座席案内人とか鳴鐘係であったり、罪人、精神病患者といった社会の最下層で、それぞれの悩みや願いを抱いて生きている人達であり、そうした人達への憐憫が、**riot** の動きの随所に瞥見できるのである。**Newgate** 襲撃の際も、暴徒の中には肉親を救い出したい一心で加わっている、見じ目な女や子供の姿まで描かれ嵐と荒れる **riot** にも人間性の名残を見せて、その激しさを和らげる。

**Mob** の本質を更に理解する手立となるのが、その中であって獅子奮迅の働きを見せる **Hugh** である。櫛を入れないさんばらの長髪、纏れた顎鬚、野獣を髣髴とさせる四肢——この男の容貌には現代の文明を根底から否定しようとするヒッピー族の原型が見られる。それは、時代の欺瞞を衝く **resistance** の表象である。どんなに紳士面をして、表面を繕ったところで、個ないし、それが形造る社会には、一皮捲れば虚偽と醜悪が渦巻いているのだ。社会そしてここで **Hugh** とは似ても似つかぬ人物が対比される。貴族社会に憩う紳士、**Sir John Chester** は礼儀正しさ、言葉使い、身の熟し、どれ一つ欠けることのない、**elegant** を地でゆく人物で、その余りの魅力に国王も **Sir** の称号を賜ったほどである。しかし、その和やかに微笑む仮面を剥けば、欲得の醜い素顔が覗く。奇しくも、**Hugh** と **Chester** は利害を一つにすることになり、粗野な **Hugh** は、洗練された **Chester** に幻惑されて、完全に心服してしまう。余りに掛離れた不釣合な二人を対比して眺めるとき、上流社会と下層社会の実相が明白になってくる。しかも驚くべきことには、**Hugh** は **Chester** がジプシー娘に生ませた子であることが終末で発かれるのである。

ここまで述べれば、**Dickens** の意図が明白に見えてくる。**Hugh** は上流社会が生んだ偽善と腐敗の落し子であり、彼の心には無意識のうちに社会を根底から蔑視し、破壊しようとする本能が宿っているのだ。暴動は単なる個人

の気紛れから湧き上がってきたのではなく、虚偽で退廃する社会の根幹に対する必然的な弾劾なのである。Hugh の醜悪さは、鏡に直写したそうした社会の実相であったのだ。

つぎに引用する Hugh の呪いは、単に Chester ひとりでなく、社会全体に投げつけられたものであった。そしてこの呪いの言葉は、物言わぬ群衆の怒りをも代弁しているのである。

‘If this was not faith, and strong belief!’ cried Hugh, raising his right arm aloft, and looking upward like a savage prophet whom the near approach of Death had filled with inspiration, ‘where are they! What else should teach me—me, born as I was born, and reared as I have been reared—to hope for any mercy in this hardened, cruel, unrelenting place! Upon these human shambles, I, who never raised his hand in prayer till now, call down the wrath of God! On that black tree, of which I am the ripened fruit, I do invoke the curse of all its victims, past, and present, and to come. On the head of that man, who, in his conscience, owns me for his son, I leave the wish that he may never sicken on his bed of down, but die a violent death as I do now, and have the night-wind for his only mourner. To this I say, Amen, amen!’<sup>1)</sup>

しかしながら、Hugh がどんな言葉を吐き、暴徒がどんなに暴れようとも、裁きの好餌となるに過ぎない。法の支配は揺がず、社会は不変の回転を続ける。Dickens はどんなに体制を攻撃しても、それは子供が親に楯突く反抗であって、その背後には絶対信頼があるのだ<sup>2)</sup>、と A. O. J. Cockshut は表現しているが、riot の当然のような収束や、良き社会を代弁する Gabriel Varden 一家の安泰を描く Dickens の姿勢には、確かに、秩序への志向が見られる。

---

1) *Barnaby Rudge*, p.596.

2) A. O. J. Cockshut, *The Imagination of Charles Dickens*, Methuen: London, 1965. (University Paperbacks), p.52.

けれども、先に述べた **Mary Jones** の処刑などに対する法への嫌悪感は拭い難く、**Dennis** というグロテスクな絞首刑執行人の登場を見ることになる。法の末端を掌る **Dennis** は民心の嫌悪感を体現して誠に醜く不気味だ。しかしこれまでに **Dickens** が創造した、単に誇張された奇異な人物と違う点は、首切り役人という法の担い手でありながら、最も辛辣な暴徒の一人でもあるという二重性と、そうした矛盾を客観視できるまでに、性格的な幅を備えていることである。

**Cockshut** は、この二面性を ‘the clash of law and violence’ という言葉で表わしている<sup>1)</sup>。平たく言えば、保守と革新が一個の人物に共存しているわけである。けれども、こうした矛盾は人間の本質とも言えるのであり、**Dennis** が特殊な人間というのではない。一個の人間の両極を非情に追跡してゆくなれば、**violence** という次元で奇妙に合一しているのではあるまいか。ただし彼の言う ‘constitootion’ は自らの **violence** が正当化されるためだけに存在する便宜的なものに過ぎず、**hanging** に対してのみ生きる喜びを見出す **Dennis** は、ただその制度が廃れるのを恐れて、右に揺れ左に揺れる。そして法の暗い側面と、暴動の中核に位置して自らの命脈を保とうとする彼は、暴動の最中であってさえも、自己を客観的に見つめ、自分の立ち所を失うまいとするのである。ところが、自分を生かしてくれるはずの **violence** と **law** が結局は二つながら彼に敵することになり、彼が栄光ある制度と称えた **hanging** の犠牲になってしまうのだ。法の末端で、首括りという **violence** を物ともしない **Dennis** は、その **violence** 故に法に罰せられなければならないという自家撞着に陥るわけだ。それは結局不可避的な法の暴力に対する、民心の忌避の表われなのである。

*Barnaby Rudge* は、**Edgar Johnson** によれば、**Dickens** の作品の中で最も不満足なものであるという<sup>2)</sup>。それは、**Gordon Riots** という叙事的な内容と平凡な日常性との噛み合わせに苦しみ、時が停止しているかのように

1) Ibid., p.75.

2) Edgar Johnson, op. cit., p.330.

思える前半の退屈さが、何の必然性もなく後半の暴動につながってゆく **plot** の不自然さ、更に、歴史的重荷を担わせるには余りにも幼稚な登場人物達——そうした一見の不完全さや稚拙さが、目の肥えた読者の興味を殺ぐことになると言えよう。

けれども、これまで述べてきたように、**Dickens** は個に **realism** を越えた象徴的な深まりを与え、作品の **unity** を害わないように、細心の注意を払っていることがうかがわれるのである。例えば、大きな欠点として指摘した五年のギャップの用い方にしても、**John** の代表する前半の平凡で退屈な日常性が、緩やかな進展では打破されず、思いもかけず勃発する暴動で打毀されることによって、その急激な偶発性の与える恐怖が、安逸を貪る上層階級に対してさらに効果的な鐘警になっているとも理解されるのである。そして **Lindsay** の指摘するように、人物ばかりでなく、**the Maypole, the Warren** といった家のもつ象徴性、明暗対位法などが、雰囲気を巧みに盛り上げ、全体的な **unity** に寄与している<sup>1)</sup>。

他の作品に見られるのと同じく、**Barnaby Rudge** の中でも、個は生き生きとその生彩を保っている。あの全てを嘗め尽すが如き暴動の最中であっても、不思議に **Hugh, Barnaby** 或いは **Dennis, Tappertit** といった個人の **image** が残像する。けれども、彼らは主義主張のない愚かな指導者たちであり、それに率いられる群衆の、それにも勝る衆愚性を暗示させるものである。こうした世の滓のような存在者が生み出すエネルギーを、われわれは眼の当り見せつけられた。端数のもつ生命力——これこそ **Dickens** が愛情をもって描き続ける自らの心でもある。自らの細い、貧弱な脚を誇りにする、虚栄心の塊のような **Simon Tappertit** のことが今まで触れられなかったが、彼は矮小な体躯の持主でありながら、**mob** の先頭に立ち、聳えるような大男の **Hugh** をも睥睨するほどの自己陶醉家である。しかし、その愚かしさにも拘らず、何という生命力であろうか。**G. K. Chesterton** は、この **Tappertit**

1) J. Lindsay, op. cit., pp.98—100.

と Dickens の類似性を指摘しているが<sup>1)</sup>、まことに諧なるかなである。

Barnaby は、打ち拉がれて、声なき人々の声を語る。それは Grip の言葉のようにもどかしく、暗い不確かな声かも知れない。しかし、それは一個の人間の過ちが、それだけにとどまらず、見えないえにしによって、社会の彼此に黒い実を結ぶことを暗示している。世の流れから隔絶されて、社会の片隅に生きている人々も、見えぬ糸によってお互が繋がれ、全体とは決して無縁ではなく、時来れば運命さえ共にすることもあり得るという、社会的連関における個の可能性、重要性を Dickens はこの作品によって初めて表現し得たのではあるまいか。

---

1) G.K. Chesterton, "Barnaby Rudge," in *Appreciation and Criticism of The Works of Charles Dickens* (Kennikat Press, Inc., 1966), p.75.